近代における高瀬川景域の発展

京都大学大学院工学研究科　学生員　○水野　萌
京都大学大学院工学研究科　正会員　出村　嘉史
京都大学大学院工学研究科　正会員　川崎　雅史
京都大学大学院工学研究科　正会員　樋口　忠彦

１．はじめに

京都の繁華街の中心部を流れる高瀬川はかつて，近世京都の経済を支えた運河であり，それに伴って木屋町通が形成・発展した．都市の近代化によって高瀬川は舟運機能を失ったが，現在は近代都市の新たな景観要素となっている．

本研究では，高瀬川と木屋町通を対象とし，対象地が魅力的な景観を持つ場所「景域」として発展した経緯を，近代以降に着目して分析した．そして京都市の近代における変化が街路景観および水辺景観に与えた影響を明らかにすることを本研究の目的とする．

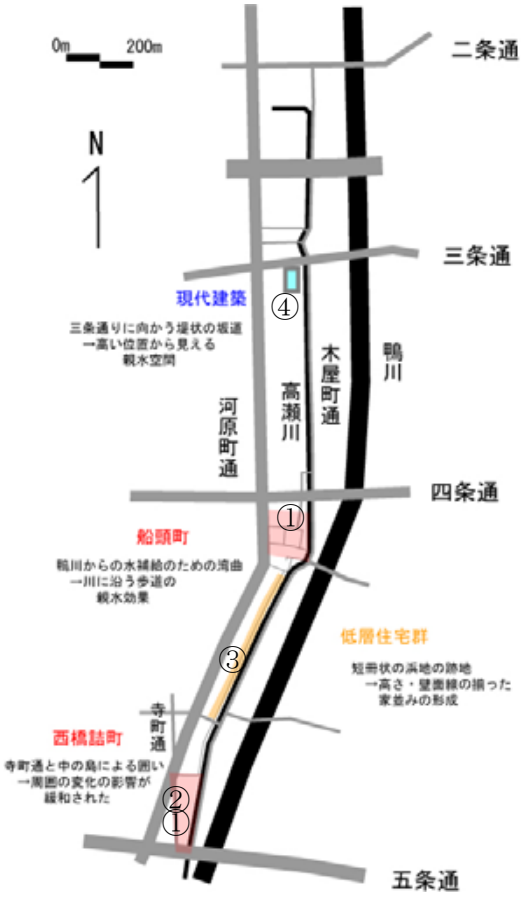

図１　全体地図

図１に対象領域を示す．ピックアップした箇所は、現在に見られる居心地のよい場所である．これらの箇所における近世から現在に至る空間変容の履歴を調査した．本稿は次のような手順でまとめられる．まず２，３章で上記の箇所の一つ，西橋詰町における分析の内容を示す．２章では近世の町の様子をまとめ，３章で近代以降の変化を考察する．そして４章で全域において調査した結果をまとめた．

２．近世までの西橋詰町

五条小橋の北西に位置する西橋詰町は高瀬川が開削される以前に町立てされた．人家が密集して建っている様子は『都名所図会』の中の「五条大橋」（図２）にも描かれている．

図２によると五条大橋と小橋は一本の橋であり，西橋詰町の向かい岸である高瀬川東岸には船頭が高瀬舟を曳くための綱引き道しかない．

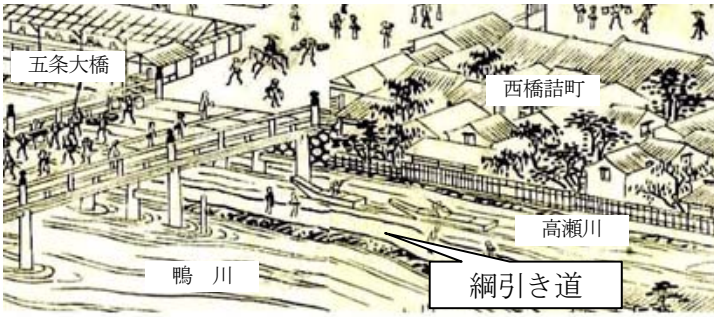

図２　『都名所図会』

３．近代以降の西橋詰町

明治 28 年（1895）京都電気鉄道株式会社による路面電車（以下「京電」と略す）が木屋町通に敷設された．京電の軌道は西橋詰町の南の民家を切り開いて敷かれ，五条小橋で高瀬川の上をまたぎ，その後は北に向かって五条から二条までの木屋町通を直進する．

Key Word：景域，高瀬川，水辺
〒606-8501　京都市左京区吉田本町　京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻　Tel 075-753-5123

鉄道の敷設のために綱引き道には**図３**のように中の島が造成された．それによってできた木屋町通が，西橋詰町の家屋より高い位置にあり，住宅群は奥まった形になっている．

やがて木屋町の京電の軌道が廃止されて，替わりに河原町が拡幅され市電が通るようになった．この結果，西端詰町の中でも，河原町通と寺町通に挟まれた区画の敷地にある建物は，高層化や商業化をした．この一方で，寺町よりも東側にあたる高瀬川沿いの家々は，寺町通によって河原町通から波及して高層化する建築群とは距離をおくことになり，寺町通と高瀬川の間の敷地内はほとんど変化を見せず，却って高層建築群の裏で都会の喧騒から隔離された区画になった．このように，西端詰町を囲う地形と寺町通の存在が周辺の近代化からの影響を和らげた．そのために西橋詰町にはこれらの影響を受けずに残された独特の雰囲気がある．

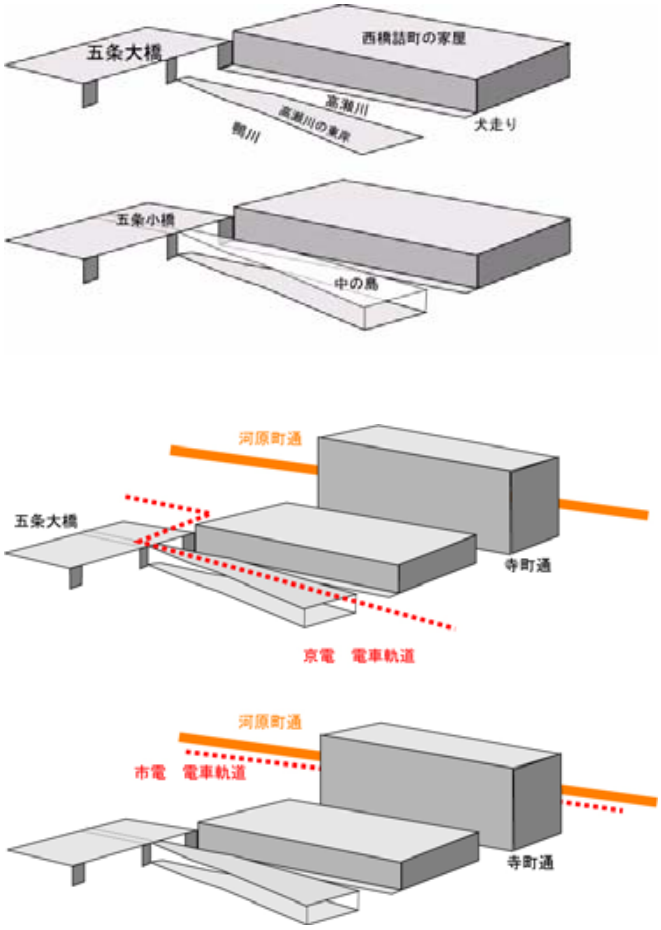

図３　西橋詰町の変遷

４．高瀬川景域の発展過程

以下の表に全域における高瀬川景域の要所の発展経緯を**表１**にまとめる．箇所の番号は，**図１**の番号に対応する．概観すると，これらの魅力ある景観を作り出す要因となっているのが，土提跡や補給水路のための川の湾曲，浜地や納屋のように，過去において実用のために形成された基盤であるということがわかる．

５．結論

木屋町通りも含めたこの景域を形成しているのは運河としての歴史のみではなく，舟運機能を失った後の京都市全体の近代化の過程も大きく影響していることが明らかになった．

都市のデザインにおいては，自然のかたちと地域の歴史が調和することが重要である．そのような歴史を反映した都市デザインへの提案をしていくことを今後の課題とする．

表１　景域の発展経緯

箇所	近世まで	変化	近代以降
①	川沿いは浜地･納屋･家屋	**京電の敷設**	川に沿う道が整備
②	木屋町通が経済･交通の中心軸	**河原町通の拡幅**	河原町通に幹線道路機能が移転し，静かな裏通りになる
③	浜地･納屋	**民家転用**	高さ・壁面線が揃った町並み形成（図４）
④	土堤跡の高低差	**近代建築**	親水性をアピール（図５）

図４　家並み

図５　近代建築

参考文献

田中尚人「水系基盤による近代京都の都市形成に関する研究」京都大学大学院工学研究科博士請求論文，2001
土本俊和「近世京都における高瀬新屋敷の成立と変容」日本建築学会計画系論文報告集 471 号
石田孝喜『高瀬川』思文閣出版，2005. 8